

児童・生徒の友人関係が学業達成に及ぼす影響

石田靖彦

学校教育講座 (心理学)

Friends' influence on academic achievement.

Yasuhiko ISHIDA

Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

問題

学習意欲といった動機づけや学業達成を高めることは、学校教育における重要な目標のひとつになっている。これまでの動機づけや学業達成に関する研究では、成功や失敗事態における帰属様式、学業に対する目標や志向性、統制に関する信念や自己効力感など、数多くの研究が行われてきた。また近年では、学習場面を取り巻く社会的文脈の重要性が認識され、教師や級友との関係といった社会的な要因が、学業に関する動機づけや学業達成にどのような影響について検討しようという研究もなされている。たとえば、ソシオメトリック地位や級友からの受容と学業達成との関連を検討した研究では、人気が高く級友から受容されている児童・生徒は、そうでない児童・生徒にくらべて学習意欲や学業成績が高いこと (e.g., Austin & Draper, 1984; Wentzel, 1991)、さらに級友からの受容の程度は、その後の学級適応にも影響を及ぼすことが報告されている (e.g., Kupersmidt, Coie, & Dodge, 1990)。これらの研究は、学校での教師や級友との関係が、学業に対する興味・関心や学業成績といった学業達成にも影響することを示している。

級友からの人気や受容の程度が、動機づけや学業達成に及ぼす影響については、直接的、間接的な2つのプロセスが考えられている (Wentzel & Caldwell, 1997)。児童・生徒は、友だち同士で協力したり助け合いながら課題に取り組むことが多いため、友だちを多く有する児童・生徒は彼らからの道具的サポートを受けやすく、学業成績が向上する (直接的影響)。また、友だちがいることによる安心感は、情緒的不満を抑制するとともに、学業に対する関心や学習意欲も高める。その結果、学業成績が向上すると考えられる。

Wentzel (1998) は、6年生167名を対象として、親や教師、友人からのサポートが学校や学業に対する動機づけや学業達成に及ぼす影響について検討した。そ

の結果、友人からのサポートは、動機づけに対して直接的な影響は及ぼしていなかったが、情緒的な苦悩を媒介として間接的に影響していることが示された。

また Wentzel & Caldwell (1997) は、中学校進学した6年生を対象として、6年時での友人関係のあり方 (相互選択関係の有無、受容の程度、集団成員性) が、その後の学業成績にどのような影響を及ぼすかを長期的に検討した。その結果、(1)中学校進学後の友人関係のあり方 (とくに集団成員性) は、7年時、8年時の学業成績と関連すること、(2)友人関係のあり方は学業成績に対して直接的な影響を及ぼすだけでなく、向社会的行動や情緒的苦悩を媒介として、学業成績に間接的な影響を与えていることが示された。

本邦でも中谷 (2002) が、5、6年生115名を対象として、級友から受容は学習に対する意欲を向上させ、その結果、学業成績が向上するというプロセスを明らかにしている。

これらの研究は、級友からの受容されていることや友人がいることによる安心感が、学業に対する意欲や関心といった動機づけを高めるとともに、彼らと学業に関連した相互作用を行うことで学業達成にも影響を与えることを示している。

従来研究における問題

しかしながら、これらの研究にはいくつかの問題や残された課題がある。第一の問題は、これまでの研究の多くは一回きりの調査によるもので、その効果を縦断的に研究しているわけでないことである。Kupersmidt, Coie, & Dodge (1990) や Wentzel & Caldwell (1997) の研究のように数年にわたって行われた調査であっても、ある時点でのソシオメトリック地位や受容とその後の適応や学業達成との関連を相関的に検討したのみで、初期のソシオメトリック地位や受容の程度が統制されていないという問題がある。ある因果の方向性を検討するには、一方の変化がその後の変化をど

の程度予測できるかという、初期の効果を統制した縦断的研究を用いる必要がある。

第二の問題は、友人関係に関する指標がソシオメトリック地位や級友からの受容の程度などで、実際に交友している友人や仲間集団の特徴については考慮されていないことである。児童・生徒の友人関係に関する研究によれば、児童期後期から青年期にかけて仲間集団の影響力が増大し、多くの相互作用はその集団内で行われることが指摘されている (e.g. Brown, 1990; Rubin, Bukowski, & Parker, 1998)。また、集団によってどのような態度や行動が重視されるかは異なることも指摘されている (Kindermann, 1993; Ryan, 2000)。たとえば、ある集団では学業に対する意欲的な態度や行動が重視され、そのような特徴を有する児童・生徒が多くの受容を得るかもしれないが、別の集団では反対の態度や行動が重視されるかもしれない。つまり、児童・生徒に及ぼす友人関係の影響を検討するには、学級での人気の高さや受容の程度といった全体的な指標だけでなく、どのような友人と交友しどのような集団に所属しているかといった、友人や仲間集団の特徴を考慮する必要があるといえる。

このことに関連して、社会心理学や社会学の領域では態度や行動における友人間の類似性や仲間集団の同質性が指摘されてきた。

たとえば、Kandel (1978a) は、9～12年生の高校生1879名 (男子773名、女子1106名) を対象として、社会人口統計学的特徴 (学年、性別、人種、宗教、親の教育層など) や薬物使用や非行行動などの問題行動、学業関連特徴 (教育の期待、学業成績、宿題に費やす時間、休学日数、授業の退屈さなど)、両親に対する親密さ、個人内指標 (政治的志向性、抑うつ、自尊心、規範のなさ、社会的孤立)、余暇活動、態度 (大人の期待への同調、職業志向性、教師に対する態度) などのさまざまな指標における友人間の類似度を検討した。その結果、友人との類似性が最も高かったのは、学年や性別、人種や年齢といった人口統計学的特徴であったが、薬物関連 (薬物使用や薬物使用の友人がいるかどうかなど)、学業関連 (教育上の向上心、学業成績、授業のさばりなど)、仲間との活動に関して比較的高い類似性が認められたことを報告している。

また、Ide, Parkerson, Haertel, & Walberg (1981) は、小学校から高校における学業領域における友人間や仲間集団内の類似性を1966年から1978年に発表された10論文をメタ分析することで検討した。そして、児童・生徒の特徴とその友人の特徴との相関の中央値は、標準アチーブメントテストで $r=.26$ 、学業成績で $r=.17$ 、教育における向上心 $r=.26$ 、職業における向上心で $r=.34$ であり、低いながらも一貫して正の相関関係にあることを指摘している。

近年では、Kupersmidt, DeRosier, & Patterson

(1995) が、小学校3、4年生554名を対象として、「もっとも親しい親友」「学校での遊び仲間」「学校外での遊び仲間」に焦点をあて、人口統計学的変数 (性別、人種、経済的地位) や行動的特徴 (攻撃性、引っ込み思案)、学業成績やソシオメトリック地位などの指標を用いて、「相互選択ペア」と「非相互選択ペア」の類似性を比較した。その結果、もっとも親しい親友、学校での遊び仲間、学校外での遊び仲間のいずれにおいても、友人ペアは非友人ペアに比べて属性の一致度が高いことが示された。また、一致数を説明変数とするロジスティック回帰分析を行ったところ、一致数が増すにつれ友人ペアになる確率が高く、攻撃性や引っ込み思案などの行動的特徴や学業成績が友人形成の基盤になっていることを指摘している。

以上の研究は、友人同士は人口統計学的変数で類似しているだけでなく、学業に対する動機づけや学業達成といった学業に関連する側面を含めた、さまざまな態度や行動の次元で類似していることを示しており、どのような友人をもつかによって学業に対する態度や行動も影響を受ける可能性を示唆している。

ただし、友人間の類似性に関する上記の知見を友人からの影響を示す結果として解釈するには問題がある。友人間の類似性には、友人から影響を受けて両者の類似性が増大するという「友人からの影響の効果 (= 社会化の効果)」だけでなく、自分と類似した人物を友人として選択するという「選択の効果」が混在しており、その効果を分離するには縦断的な手法を用いなければならないからである (Cohen, 1977; Kandel, 1978b)。

本論文では、学業に関連した態度や行動における友人からの影響に焦点をあて、その効果を縦断的に検討した研究をいくつか紹介する。そして、友人からの影響に関するモデルについて検討を加える。

友人や仲間集団からの影響

Kandel (1978b) は、高校生の実際の友人ペア (957ペア) を対象として、薬物使用の頻度、教育上の向上心の程度、政治的志向性、問題行動への関与、という4つの属性における実際の類似性を、学年初め (T1) と学年末 (T2) の2回にわたって測定した。そして、一貫して友人であるペア (= 安定ペア)、T2で新たに友人になったペア (= 新規形成ペア)、T1で友人であったがT2で友人でなくなったペア (= 崩壊ペア) での類似性を比較することで、友人間の類似性に及ぼす選択と社会化の相対的な効果について検討を加えた。

類似性の推移については、安定ペアは崩壊ペアにくらべてT1の時点で類似性が高く、崩壊ペアは新規形成ペアにくらべてT1の時点での類似性 (政治志向性以外) が低いことが示された。この結果は、T1の時

点でより類似した他者が選択し、また類似していなかったペアではT1からT2にかけてより類似した他者を選択するようになることを意味しており、友人選択において選択の効果が生じていることが示された。また社会化の効果については、安定ペアのT1とT2の類似度を比較することで検討した。その結果、安定ペアの類似性は、T1からT2にかけて上昇していることが示された。

Cohen (1977) は、仲間集団の変化と個人の属性の変化を縦断的に測定することで、集団の同質性に及ぼす、(1)集団の構成員の変化 (= 選択と排除) の効果と、(2) 成員の属性の変化の効果とを分離する手法を提案した。そして高校内に存在する49の実際の仲間集団 (男性11集団46名、女性38集団210名) を対象として、青年期に関連のある活動、願望、価値観などのさまざまな側面を、学年初め (T1) と学年末 (T2) の2回にわたって測定し、仲間集団の同質性の変化に及ぼす2つの効果について検討を加えた。その結果、(1)同調への圧力による同質性の向上効果については、その効果は認められるもののそれほど大きくないこと、(2)集団の構成員の変化による効果については、逸脱者の排除の効果はほとんど認められず、類似した他者の加入による効果も極めて小さいこと、(3)関係の初期段階ですでに集団の同質性は高く、集団の同質性を生じさせる要因としては、初期段階での選択の効果が極めて大きいことが示された。

(1)学業領域における影響

Kandel (1978b) やCohen (1977) の研究では、学業に関連した指標はさまざまな指標のひとつとしての扱いに過ぎないが、学業に関連した態度や行動に焦点を当て、それらの指標における友人からの影響を検討した研究もある。

Epstein (1983) は、1973年から1974年の1年間にわたって行われた、学業や友人関係に関する大規模な縦断的調査研究のデータ (5, 6, 8, 12年生の計4163名) を用いて、学業に関連する態度 (学校に対する満足感や大学までの進学計画) や学業達成に及ぼす仲間集団の影響について追跡的に検討した。調査1回目の時点における自分の得点と仲間集団の得点を用いて、HH群 (自分=平均以上、友人=平均以上)、HL群 (自分=平均以上、仲間集団=平均未満)、LH群 (自分=平均未満、仲間集団=平均以上)、LL群 (自分=平均未満、仲間=平均未満) の4群に分類し、自分の得点が1年後 (調査2回目) にどのように変化するかを比較した。

まず自分の得点が平均未満であるLL群とLH群の1年後の得点を比較したところ、学校への満足感と数学の成績以外のすべての指標で、LH群はLL群よりも高い得点を有していることが示された。またその傾

向は大学への進学希望や学業成績で顕著であることが示された。自分の得点が平均以上であるHL群とHH群の1年後の比較では、HH群はHL群よりもすべての指標で高い得点を有していることが示された。このことは、どのような友人をもつかによって、その後の学業に対する態度や学業成績が異なることを示している。

さらに仲間からの影響が、相互選択、一方選択、安定選択によって異なるかどうかを検討するために、T1における相互選択友人、一方選択友人、安定友人 (T1, T2の両時点で選択した友人) が、T2における自己の得点に及ぼす影響を、T1の自己の得点を統制した重回帰分析を行った。その結果、一方選択友人であっても相互選択友人や安定友人と同じくらいT2の得点にプラスの影響を及ぼしうることが示された。

Altermatt & Pomerantz (2003) は、4, 5, 6年生の計929名 (男子463名、女子466名) を対象として、児童と友人は学業に関連した信念や態度 (= 「コンピテンス関連信念」と「動機づけ信念」) や学業成績においてどの程度類似しているか、また児童の学業に関連した信念や学業成績は友人の信念の影響をどの程度受けているかを、3学期 (春、秋、春) にわたって縦断的に検討した。また友人関係の強さの効果として、双方が親友としてあげた関係 (= 相互選択関係) とそれ以外の関係 (= 片方選択関係) の違いについても検討を加えた。

各調査時期での自己と親友との類似性については、時期によって多少の違いがあるものの、学業成績、コンピテンス関連信念、動機づけ信念、のいずれにおいても有意な関連が示された。また、自己と友人との類似性は、時期や指標によって多少の違いがあるものの、相互選択の方が片方選択よりも強いことが示された。

友人からの影響 (社会化の効果) については、自己の得点を説明変数とし、それ以前の自己の得点を統制した上で、それ以前の親友の得点を説明変数とする階層的重回帰分析により検討した。その結果、学業成績ではいずれの時期でも有意な関連が示された。コンピテンス関連信念や動機づけ信念では、学業成績ほどの関連は示されなかったが、いくつかの指標で有意な関連が示された。また、時期や指標によって異なるものの、相互選択関係の方が片方選択関係よりも関連が強いことが示された。さらに、安定的な関係と不安定な関係の違いを付加的に検討したところ、学業成績とコンピテンス関連信念において、安定的な関係の方が不安定な関係よりも影響力が強いことが示唆された。

(2)仲間集団の影響

Cohen (1977) の研究を除いて、これまでの多くの研究では、友人や仲間集団の測定法として親しい友人を数名挙げさせるという方法が用いられていた。しかし、

このような方法で測定された友人や仲間集団は、厳密には仲間集団を測定しているものではない。仲間集団は一般的に、2名から12名で構成されており、人数制限のある方法では仲間集団の全体像を捉えきれないからである (e.g., Rubin, et al., 1998)。また、仲間集団は単に多くの時間や活動を共有しているだけでなく、その存在が他の児童・生徒にも広く認知されているという特徴を有している (kindermann, 1993)。このような仲間集団としての特徴は、その影響の効果は、二者関係とは異なる可能性がある。

動機づけや学業達成に及ぼす仲間集団の効果については、これまでほとんど検討されてこなかったが、近年になって仲間集団を対象とした研究もなされはじめた。

Kindermann (1993) は、小学校4、5年生109名を対象にして、Cairnsら (1985) の「社会合成マッピング social composite mapping」という手法を用いて学級内の仲間集団を特定し、仲間集団の形成に及ぼす学業動機づけの効果 (= 選択過程) と、仲間集団の特徴が児童の学業動機づけに及ぼす影響について縦断的 (学年初めと学年末) に検討した。その結果、学級には2から7人で構成される仲間集団が認められ、その仲間集団は学業に対する動機づけにおいて高い同質性を有していることが示された。また仲間集団の構成員は学年初めから学年末にかけて約半数が入れ替わっていたが、仲間集団の同質性は維持されていた。このことから、動機づけにおける類似性は仲間集団の形成や維持に関連していることが示された。

集団からの影響の効果 (= 社会化の効果) については、学年末の動機づけを基準変数、学年初めの動機づけと学年初めの仲間の動機づけの平均値を説明変数とする階層的重回帰分析により検討した。その結果、児童の動機づけの変化は、学年初めの仲間集団の特徴から予測できることが示された。

さらに、Kindermann, McCollam, & Gibson (1996) は、9から12年生の高校生を対象とした研究を行い、同様の結果を確認している。

Ryan (2001) は、7年生の331名を対象にして、仲間集団が動機づけに関する信念や学業達成に及ぼす影響について、集団を単位として縦断的 (10月 = T1, 翌

年5月 = T2) に検討した。動機づけについては、Eccles (1983) の「期待×価値モデル」に準拠して、「期待」については「成功の予測 (= 学校でうまくできる程度に関する信念)」、「価値」については「内発的価値 (= 学業に対する興味や喜び) と、「効用価値 (= 学業に対する重要性や効用の認知)」に分けて測定した。仲間集団の同定については、ソシオメトリックデータを社会的ネットワーク分析を用いて解析し、①クリーク、②ルーズグループ、③ガイド、④孤立者、⑤リエゾン、に分類した (①②③のみを分析対象とした)。そして、動機づけ・学業成績 (T2) に及ぼす仲間集団 (T1) の影響について、階層的線形モデルを用いて分析した。その結果、動機づけ、学業成績はT1からT2にかけて低下するものの、その低下の程度はT1における仲間集団の特徴によって異なることが示された。すなわち、高い動機づけや学業成績を有する仲間集団に属している生徒は、動機づけや学業成績の低下が少なかったのに対し、低い動機づけや学業成績を有する仲間集団に属している生徒は動機づけや学業成績が大きく低下していた。また仲間集団の影響の効果は、学業成績でもっとも強く、内発的価値で有意、成功期待では傾向、効用価値では有意でなかった。このことから、仲間集団の影響は、内発的価値には影響するものの、成功期待や効用価値には必ずしも大きな影響は及ぼさないなど、動機づけの側面によって異なることが示唆された。

友人や仲間集団の影響に関するモデル

これまでのレビューでみてきたように、友人や仲間集団の影響に関しては、これまで異なる領域で検討されてきた。ひとつは、友人からの受容や道具的、情緒的なサポートが学業への動機づけや学業達成に及ぼす影響を検討したもので、もうひとつは友人間の類似性や仲間集団の同質性を検討したものである。前者については、縦断的な研究が乏しいために、友人からの受容やサポートの増減が児童・生徒の学業領域での変化にどのような影響を及ぼすかは検討できないが、横断的な相関研究では正の関連が指摘されていることから、プラスの影響が示唆される。

一方、友人間の類似性や仲間集団の同質性に関する

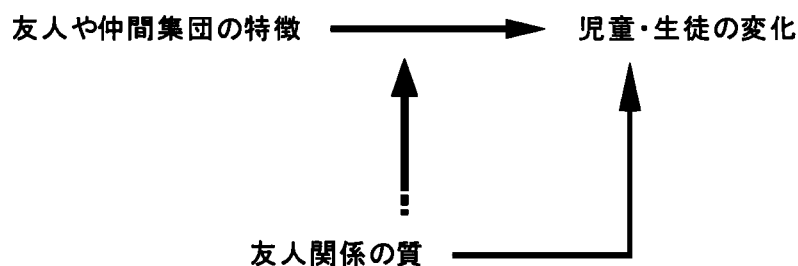


Figure 1 友人や仲間集団の影響 (Berndt, 2002 より一部改変)

研究では、学業領域での態度や行動の類似性が友人選択の基盤になっているだけでなく、長期間にわたって行動をとともにすることで学業領域での態度や行動がより類似してることが示された。このことは、学業に対してポジティブな態度や行動を示す友人と一緒にいる児童・生徒は、学業に対してよりポジティブな態度や行動をとるようになるし、逆にネガティブな態度や行動を示す友人と一緒にいる児童・生徒は、学業に対してよりネガティブな態度や行動をとるようになること、つまり友人からの影響は友人のもつ特徴によってプラスにもマイナスにも作用し得ることを意味している。

Berndt ら (Berndt, 1992, 1999; Berndt & Keefe, 1996) は、これまでの研究では友人の態度や行動といった友人の特徴の効果と、その友人との関係の質の効果が十分区別されてこなかったことを指摘した上で、友人の特徴の効果と友人関係の質の効果に関する包括的なモデルを提案している (Figure 1)。

友人の特徴の効果とは、友人の態度や行動の影響を受けて友人間の類似性が増すという効果のことで、そのメカニズムについては、モデリングや同一視、友人からの強化や集団圧力などが考えられている (e.g., Berndt, 1999; Ryan, 2000)。行動をとともにする友人や仲間集団の態度や行動は、児童・生徒にとって一種のモデルとして機能しており、友人や仲間集団の態度や行動は取り入れられやすい (Bandura, 1986; Schunk & Zimmerman, 1996)。また仲間集団では、斉一性への圧力が働いており、より類似した態度や行動が強化されやすいことも指摘できる。Sage & Kindermann (1999) は、実際の教室場面での児童の行動 (授業関連、授業非関連) とそれに対する仲間からの反応 (承認、否認) と関連性を検討し、集団によって仲間からの反応が異なることを報告しているが、このような仲間からの強化のあり方も集団内の同質性の向上に関連していると考えられる。

一方、友人との関係の質の効果とは、友人との関係そのものからもたらされる効果のことである。そしてこの効果は、「直接的な効果」と「間接的な効果」という2つの異なる効果に区別される (Berndt, 2002)。これまでの友人関係に関する研究では、友人関係の行動的・情緒的な特徴として「向社会的行動」や「自己開示」「親密性」「忠実性」などが高く、「葛藤」や「支配」「競争」などが少ないことが指摘されてきた (e.g., Newcomb & Bagwell, 1995)。Hartup & Stevens (1997) は、友人関係のこれらの特徴を整理して、その深層構造として「親密性 closeness」と「援助性 supportiveness」を指摘しているが、関係の質の直接的な効果とは、このような親密性や援助性をもたらす効果のことである。これまでの横断的研究によれば、親密な友人がいることによる情緒的な安心感や友だちか

ら友だちからの情緒的・道具的なサポートは、学業に対する興味・関心や学業成績と正の関連を有することが明らかにされている (中谷, 2002; Wentzel, 1998)。

他方、友人関係の質に関する間接的な効果については、これまでほとんど取り上げられなかったが、Berndt (2002) はその一例として友人の特徴の効果調整する効果を指摘している。どのような友人を有するかによって児童・生徒の態度や行動は影響を受けるが (= 友人の特徴の効果)、その影響の強さはその友人との関係の質によって左右される (= 関係の質による調整効果) と考えられる。たとえば、少年犯罪に関する研究では、非行少年と交友している青年は自分も非行を犯すようになるが、その傾向はその少年との関係がより親密であるほど顕著であることが指摘されている (Agnew, 1991)。これらの研究は、少年犯罪のという偏った例であるが、同様のメカニズムは、一般的な特徴についても生じる可能性がある。

結論と今後の課題

友人や仲間集団の特徴の効果

学業領域における友人や仲間集団の特徴の効果については、動機づけや学業への態度といった情緒的、認知的側面だけでなく、学業成績といった学業達成でも多くの研究で支持されており、友人や仲間集団がどのような学業的な特徴を有しているかによって、児童・生徒の学業的な特徴は友人や仲間集団の特徴に類似した方向へと変化させる傾向があるといえる。

ただし、一概に学業領域における友人や仲間集団の特徴の効果といっても、その効果は学業に対する態度や信念といった動機づけの側面と学業成績などの学業達成では若干異なるようである。たとえば、学業に関する信念や態度と学業達成の双方を測定した Ryan (2001) や Altermatt & Pomerantz (2003) の研究では、学業成績における友人や仲間集団の効果は、動機づけなどの認知的、情動的な側面に比べて相対的に大きな影響が示されている。これには、学業に対する信念や態度が児童や生徒の自己評定であるのに対し、学業成績は実際の成績の平均値や GPA など客観的な指標であるという違いが関連しているとも考えられるが、各指標の顕現性の違いも関連していると思われる。学業成績は普段の学習場面での行動や実際の成績によって比較的容易に知ることができのに対し、学業に対する信念や態度は実際に話をしてみないとわからない。つまり、友人関係や仲間集団は学業に対する信念や態度の類似性を基盤にして形成されるというよりは、むしろ顕現性の高い学業達成の類似性を基盤として形成され、その達成の類似性の高い友人や仲間集団と行動をとともにする中で、学業に対する信念や態度も影響を受けるといった可能性が考えられるのである。これまで動機づけに関する研究では、「動機づけ→学業達

成」という方向性が仮定されており、友人や仲間集団の特徴の効果を考える上でも、「友人や仲間集団の動機づけ→児童・生徒の動機づけ→児童・生徒の学業達成」という方向性が暗黙裡に仮定されてきた。しかし、顕現性の高さということを考慮すれば、「友人や仲間集団の学業達成→児童・生徒の学業達成→児童・生徒の動機づけ」という方向性も想定できるはずである。今後は、このような方向性も視野に入れて検討する必要があるだろう。

また今後の課題としては、学業に対する信念や態度については、必ずしも一貫した結果は得られていないことが挙げられる。たとえば、Ryan (2001) の研究では、仲間集団の影響は勉強に対する内発的価値や学業成績では認められたが、成功期待や効用価値では認められなかった。他方、Altermatt, & Pomerantz (2003) の研究では、学業成績では一貫した影響が認められたものの、動機づけに関する信念に対する影響は相対的に小さく、しかも時期によって異なるという結果が示された。これらの結果は、測定尺度や分析手続きが異なるために単純な比較は困難であるが、今後は、学業に関連する信念や態度について、どのような側面において影響力が強くてどのような側面で影響力が弱いのかをより詳細に検討する必要があるだろう。

関係の質の効果

関係の質に関する直接的な効果については、横断的な研究では有意な関連が示されているものの、縦断的な研究では必ずしも大きな影響は見出されていない。たとえば、Berndt & Keefe (1995) は、自己開示や向社会的行動といったポジティブな特徴の多い友人関係をもつ生徒は、その後の学級への関与が高まることを見出したが、学業成績ではこのような友人関係の効果は見出せなかった。また、Wentzel, Barry, & Caldwell (2004) は、友人をもっていることやその友人の特徴が、2年後の向社会的行動や学業達成に及ぼす長期的な影響について検討した。その結果、向社会的行動への影響については友人の特徴の効果が示されたものの、学業達成への影響については友人をもっていることやその友人の特徴の効果は認められなかった。

このように横断的研究と縦断的研究で一貫した結果が得られていないことについては、関係の質の効果が友人の特徴の効果にくらべて小さいか、あるいは友人の特徴の効果によって相殺される可能性が考えられる。たとえば、友人や仲間集団の特徴の効果では、学業に関してポジティブな特徴を有する友人をもっている児童・生徒は、学業に対してポジティブな影響を受けるのに対し、ネガティブな特徴を有する友人をもっている児童・生徒は、ネガティブな影響を受けることが示されていた。このことは、友人や仲間集団の特徴と彼らとの相互作用は独立ではなく、どのような友人

や仲間集団に所属するかによって、彼らとどのような相互作用が行われどのような態度や行動がサポートされるかが異なることを示唆している。Sage & Kindermann (1999) は、実際の授業場面においてどのような行動が仲間から賞賛され否認されるかを検討し、授業への積極的な行動に対する仲間からの反応が仲間集団によって異なることを明らかにしているが、まさにこのような現象が授業場面以外でも生じている可能性がある。今後は、友人や仲間集団の中で実際にどのような相互作用が展開され、それが友人や仲間集団の特徴によってどのように異なるのかを明らかにする必要があるだろう。

また今後の課題としては、関係の質の定義やその効果のメカニズムをもう少し精緻化する必要性が挙げられる。たとえば、Berndt (1999, 2002) は、質の高い友人関係として「向社会的行動」「自己評価のサポート」「親密性」「忠実性」などのポジティブな特徴を多く有し、「葛藤」「支配」「競争」などのネガティブな特徴が少ない関係として定義しているが、友人や仲間集団からの影響のメカニズムを考える上では、少なくとも親密感やポジティブな感情といった本人が感じる情緒や感情と、実際に友人との間でやり取りされる相互作用は区別する必要がある。それは、友人に対する情緒や感情と実際の相互作用では、想定される友人からの影響過程が異なると考えられるからである (e.g., Wentzel & Caldwell, 1997)。また、友人に対する情緒や感情と実際の相互作用の区別は、関係の質の直接効果と間接効果（調整効果）を弁別する上でも重要である。なぜなら、関係の質の間接効果（調整効果）として想定されるモデリングや同一視の過程では、友人に対する情緒や感情の強さが調整要因として機能すると考えられているからである (e.g., Bandura, 1986)。

Berndt (1999, 2002) が指摘するように、関係の質の効果については、これまで十分な検討がなされてこなかった。とくに関係の質の直接効果と間接効果の区別については、ほとんどなされていないといってよい。今後は、関係の質に関する定義やメカニズムをより明確にした上で、より多くの研究が行われることが期待される。

引用文献

- Agnew, R. 1991 The interactive effects of peer variables on delinquency. *Criminology*, 29, 47-72.
- Altermatt, E. R., & Pomerantz, E. M. 2003 The development of competence-related and motivational beliefs: An investigation of similarity and influence among friends. *Journal of Educational Psychology*, 95, 111-123.
- Austin, A. M. B., & Draper, D. C. 1984 The relationship among peer acceptance, social impact, and academic achievement in middle childhood. *American Educational Research Journal*, 21, 597-604.

- Bandura, A. 1986 *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. Englewood: Prentice Hall.
- Berndt, T. J. 1992 Friendship and friends' influence in adolescence. *Current Directions in Psychological Science*, 1, 156-159.
- Berndt, T. J. 1999 Friends' influence on students' adjustment to school. *Educational Psychologist*, 34, 15-28.
- Berndt, T. J. 2002 Friendship quality and social development. *Current directions in Psychological Science*, 11, 7-10.
- Berndt, T. J., & Keefe, K. 1996 Friends' influence on school adjustment: A motivational analysis. In J. Juvonen, & Wentzel, K. R. (Eds.) *Social motivation: Understanding children's school adjustment*. New York: Cambridge University Press. Pp.248-278.
- Brown, B. B. 1990 Peer groups and peer culture. In S. S. Feldman & G. R. Elliott (Eds.), *At the threshold: The developing adolescent*. Cambridge: Harvard University Press. Pp.171-196.
- Cairns, R. B., Perrin, J. E., & Cairns, B. D. 1985 Social structure and social cognition in early adolescence: Affiliative patterns. *Journal of Early Adolescence*, 5, 339-355.
- Cohen, J. M. 1977 Sources of peer group homogeneity. *Sociology of Education*, 50, 227-241.
- Eccles, J. 1983 Expectancies, values and academic behaviors. In J. T. Spence (Ed.), *The development of achievement motivation*. Greenwich: JAI. Pp.283-331.
- Epstein, J. E. 1983 The influence of friends on achievement and affective outcomes. In J. L. Epstein & N. Karweit (Eds.), *Friends in school: Patterns of selection and influence in secondary schools*. New York: Academic Press. Pp. 177-200.
- Hartup, W. W., & Stevens, N. 1997 Friendships and adaptation in the life course. *Psychological Bulletin*, 121, 355-370.
- Ide, J. K., Parkerson, J., Haertel, G. D., & Walberg, H. 1981 Peer group influence on educational outcomes: A Quantitative synthesis. *Journal of Educational Psychology*, 73, 472-484.
- Kandel, D. B. 1978a Homophily, selection, and socialization in adolescent friendships. *American Journal of Sociology*, 84, 427-436.
- Kandel, D. B. 1978b Similarity in real-life adolescent friendship pairs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 306-312.
- Kindermann, T. A. 1993 Natural peer groups as contexts for individual development: The case of children's motivation in school. *Developmental Psychology*, 29, 970-977.
- Kindermann, T. A., McCollam, T. L., & Gibson, E. 1996 Peer networks and students' classroom engagement during childhood and adolescence. In J. Juvonen & K. R. Wentzel (Eds.), *Social motivation: Understanding children's school adjustment*. New York: Cambridge University Press. Pp. 279-312.
- Kupersmidt, J. B., Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1990 The role of poor peer relationships in the development of disorder. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. New York: Cambridge University Press. Pp.274-305.
- 中谷素之 2002 児童・生徒の社会的責任目標と友人関係, 学業達成の関連—友人関係を媒介とした動機づけプロセスの検討— 性格心理学研究, 10, 110-111.
- Newcomb, A. F., & Bagwell, C. 1995 Children's friendship relations: A meta-analytic reviews. *Psychological Bulletin*, 117, 306-347.
- Rubin, K. H., Bukowski, W., & Parker, J. G. 1998 Peer interactions, relationships, and groups. In N. Eisenberg (Ed.), W. Damon (Series Ed.), *Handbook of child psychology (vol.3): Social, emotional, and personality development*. New York: Wiley. Pp.619-700.
- Ryan, A. M. 2000 Peer groups as a context for the socialization of adolescents' motivation, engagement, and achievement in school. *Educational Psychologist*, 35, 101-111.
- Ryan, A. M. 2001 The peer group as a context for the development of young adolescent motivation and achievement. *Child Development*, 72, 1135-1150
- Sage, N. A., & Kindermann, T. A. 1999 Peer networks, behavior contingencies, and children's engagement in the classroom. *Merrill-Palmer Quarterly*, 45, 143-171.
- Schunk, D. H., & Zimmerman, B. J. 1996 Modeling and self-efficacy influences on children's development of self-regulation. In J. Juvonen, & Wentzel, K. R. (Eds.) *Social motivation: Understanding children's school adjustment*. New York: Cambridge University Press. Pp.154-180.
- Wentzel, K. R. 1991 Relations between social competence and academic achievement in early adolescence. *Child Development*, 62, 1066-1078.
- Wentzel, K. R. 1998 Social relationships and motivation in middle school: The role of parents, teachers, and peers. *Journal of Educational Psychology*, 90, 202-209.
- Wentzel, K. R., & Caldwell, K. 1997 Friendships, peer acceptance, and group membership: Relations to academic achievement in middle school. *Child Development*, 68, 1198-1209.
- Wentzel, K. R., Barry, C. M., & Caldwell, K. A. 2004 Friendships in middle school: Influences on motivation and school adjustment. *Journal of Educational Psychology*, 96, 195-203.

付 記

本研究は、平成14-16年度文部科学省科学研究費補助金（若手(B): 14710077）を受けて行われました。本論文を作成するにあたってご指導いただきました名古屋大学大学院教育発達科学研究科 吉田俊和教授に感謝いたします。

(平成16年 9月17日受理)